

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第4章 ダビデと他の詩篇記者たちの祈り①



サウルの姿を見た後にダビデの献身を見ると、あたかも暗い牢獄から陽の光のもとに出てきたかのような気分になります。ダビデは神の心になかった人でした(使徒 13:22 を参照)。サウルは神の心になわず、反抗的で不従順な人でした。ここに、聞かれる祈りにとって不可欠な鍵を見ることができます。サウルの生涯には、主からの答えは皆無であったように思われますが、対照的に、ダビデの生涯は、神からの答えにあふれているように思われるからです。

ダビデは明らかに、祈りが人生のあらゆる局面にふさわしいものであることに気づいていました。その結果、彼の生涯の記述と詩篇の両方に見られる彼の祈りは、懇願、告白、讃美、証しを含むものとなっています。置かれた状況の善し悪しにかかわらず、困難が迫り来る時も、祝福にあふれていた日々も、ダビデは祈ったのでした。

主への信頼

戦いは(ゴリアテに始まり)ダビデの生涯の前半において大きな位置を占めるものでした。そして、彼は戦いをよく学びつつも、主に対する全き信頼を保ち続けました。戦場での武勲のゆえに主を無視するようになるという事態は、なんとしても避けようとしたのです。

詩篇に記録されているものを除き、ダビデの最初の祈りとして記録されているものは、サウルのものとはきわめて対照的なものとなっています。「そこでダビデは主に伺って言った、『私が行って、このペリシテ人を打つべきでしょうか。』主はダビデに仰せられた。『行け。ペリシテ人を打ち、ケイラを救え』」(Iサムエル 23:2)。サウルは主に同じ問いをしましたが、何の答えも得られませんでした。ダビデは祈り、すぐに答えをいただきました。答えをいただくということは、願っている内容もさることながら、願っている本人の心にも左右されるものです。神は、ダビデを真のしもべ、ご自身のお心になかった者、すなわち、主のみこころならば何でも行うつもりでいる者としてご覧になっていました。聖書はこの事実、特別な注意を向けさせています(詩篇 89:19-20、Iサムエル 13:14、使徒 13:22 を参照)。神のみこころを行いたいという願いと意志は、私たちが祈りの中で神に近づくうえで本質的なことなのです。

ダビデは、主からのお言葉を聞いたのだということを確認したく思っていました。「ダビデはもう一度、主に伺った。すると主は答えて言われた。『さあ、ケイラに下って行け。わたしがペリシテ人をあなたの手へ渡すから』」(Iサムエル 23:4)。ダビデは、決して、勝手な思い込みを抱いたり、過剰な確信を抱いたりすることのない人物でした。今日、一つの問題について二回以上祈ることは不信仰の証拠だと教える人々がありますが、彼はそういった人々とは違いました。彼の手には他の人々の命が委ねられていたのであり、そこまで進んできた方向が確かなものだということを確認することは、思慮深い行動にほかなりませんでした。



そしてダビデは言った。「イスラエルの神、主よ。あなたのしもべは、サウルがケイラに来て、私のことで、この町を破壊しようとしていることを確かに聞きました。ケイラの者たちは私を彼の手引きに引き渡すでしょうか。サウルは、あなたのしもべが聞いたとおりに下って来ますでしょうか。イスラエルの神、主よ。どうか、あなたのしもべにお告げください。」主は仰せられた。「彼は下って来る。」ダビデは言った。「ケイラの者たちは、私と私の部下をサウルの手引きに引き渡すでしょうか。」主は仰せられた。「彼らは引き渡す。」(Iサムエル記 23:10-12)

神は、求める人々に必要な知識を分かち合ってくれますが、引き替えに、それに基づいて行動することを期待されます。ダビデは、神から与えられた情報に照らし合わせて、自分の行動の方向性を決めました。彼は祈りにおいて気まぐれになることはありませんでした。人々は時としてそうなるのですが、ダビデは、神から明確に求められている行動を起こすのに躊躇することはなかったのです。

また別の時には、次のように記されています。「ダビデは主に伺って言った。『あの略奪隊を追うべきでしょうか。追いつけるでしょうか。』するとお答えになった。『追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる』」(Iサムエル 30:8)。

このとき、ダビデが神に近づいたのは、祭司のエブヤタルを通じてでした。エブヤタルは、神がお定めになったウリムとトンミムを用いて、そのみこころを見定めました。今日、私たちには、キリスト以外に仲介者となる祭司は必要ではなく、神秘的な方法も必要ではありません。今や私たちは、心に主のみこころを伝えてくださる方として聖霊をいただいているからです。

兵士から王になっても、ダビデの祈りの習慣は変わりませんでした。「この後、ダビデは主に伺って言った。『ユダの一つの町へ上って行くべきでしょうか。』すると主は彼に、『上って行け』と仰せられた。ダビデが、『どこへ上るのでしょうか』と聞くと、主は、『へブロンへ』と仰せられた(IIサムエル 2:1)。祈りの歩みがしっかりと根を張り、確立されていて、人生の様々な変化に遭遇してもそれゆえ揺るがされないということは、まさにほめられるべきことです。社会的な立場が上がると、自分をまさにそこに至らしめてくれた習慣を失っていく人々もありますが、ダビデは違いました。地位の変化は、おそらくはさらに切に祈るようになったことこそあれ、彼の祈りの習慣に何の変化をもたらすこともなかったのです。

自分には主の導きが必要だということに対するダビデの敏感さほど、私たちにとって模範となるものはありません。神がペリシテ人の滅亡を既にお定めになっているということについては、彼は微塵も疑っていませんでした。ただ、そのタイミングと具体的な方法だけは、依然として不確かなままでした。そのため、彼は神の真実で明白な導きを定期的に求め、最終的にそれをいただいたのです。

そこで、ダビデが主に伺ったところ、主は仰せられた。「上って行くな。彼らのうしろに回って行き、バルサム樹の林の前から彼らに向かえ。バルサム樹の林の上から行進の音が聞こえたら、そのとき、あなたは攻め上れ。そのとき、主はすでに、ペリシテ人の陣営を打つために、あなたより先に出ているから。」(IIサムエル記 5:23-24)





質問

- 1 ダビデが祈りについて明らかに気づいていたことは何ですか？
気づいていたからこそ、ダビデの祈りはどのようなものだったと言えるでしょうか？
- 2 ダビデの最初の祈りとサウルの祈りはきわめて対照的でした。どのような点で対照的ですか？
ダビデの祈りの動機はどんなものですか？ あなたはダビデと同じ願いと動機をもって祈っていると思いますか？
- 3 ダビデは祈って教えられたなら、その通りに行動することを躊躇しませんでした。
あなたはどうか？逆に、祈りなしに行動するとどんな危険があると思いますか？
- 4 祈りにおいて主のみこころを伝えるのは聖霊の働きです。
聖霊による確信をいただいた時、心にどんな変化が起こると思いますか？
- 5 兵士から王へと地位が変わってもダビデが変わらなかったことはどんなことですか？
地位や環境の変化に左右されずに祈り続けるためにはどうしたらよいと思いますか？
- 6 今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？
どんなことを実践したいと思いますか？



祈り

主よ。私が祈ることから遠ざかることなく、あなたが語られることをしもべとして聞くことができますように。どのように祈ったらよいかわからない時でも聖霊が私の祈りを助けて下さることを信じて、祈り続けることができますように。

